



別れのうた

poripeimosu

毎日、こそこそとこんなことをしているなんて知ったら、神宮寺はきっと殴るか、この部屋を出て行くかするかもしれない。軽蔑し、不潔だと詰りもするだろう。何故なら、この行為は大切な人間を不信に落とし、残酷な言葉を吐かせてしまうだけの背徳を含んでいるからだ。

それでも、神宮寺の怒った顔を見たらきっと今以上に惹かれてしまうんだろう。神宮寺の感情表情は、幼い頃の姿を容易に連想させるほど素直で、こちらの方が恥ずかしくなるほどいつもストレートなのだ。その正直さに、奪われ続けている。

そう思うと、いっそ何もかも露呈して、この行為に顔を歪ませ、声を荒げる神宮寺を見てみたいような気にもなってくる。

だからといって、勿論無闇に怒らせたいわけじゃない。当然、バレない方がいいに決まっている。少なくとも、今のままでいたいと思うからこうして息を殺し、寝静まったのを確認して、影のように動いているのだ。

部屋を出て耳を澄ますと、向かいの神宮寺の部屋から彼の規則正しい寝息がしていた。いつものようにそれをその場で十五回数えてから、今夜も呼吸を止めてそっとダイニングを出てきた。暗い廊下に出て、脱衣所の扉の隙間を注意深く通り抜ける。そして一度、隙間風のような息を鼻から吐き、意を決して洗濯機の蓋を開けた。二人のアルバイト代を足して買い換えたドラム式洗濯機の頑丈な扉が、ガチッ、と大袈裟な音を立てる。暗闇の中でしばらくじっとし、何の変化もないことを確認してから、その中に手を伸ばし、まだ糊のきいている目当てのYシャツをゆっくりと引き抜いた。

鼻を近づけなくても、もう神宮寺のにおいがした。それを顔に押し当てる。空気の層を壊さないよう慎重に、深く長くそのにおいを嗅ぐ。嗅ぎ始めてしばらくすると、鼻が色んなにおいを見つけ始める。そこから神宮寺がどんな一日を送ったのか、想像に耽るのがいつの間にか癖になってしまったのだった。悪癖だと分かっているにもかかわらず。日々、遠くなっていく神宮寺を、いつでも一番に理解していたかった。

神宮寺とは、高校一年のときに出席番号が隣同士で仲良くなり、それから三年間、ほとんどの時間を一緒に過ごした。お互い部活にも入らず登下校も一緒に、帰ってからは互いの家でゲームや漫画を読んではバカみたいに笑いあったり、時にはそれなりに激しい喧嘩をしたりしながら同じ時間を共有してきた。

大学も同じところを受けた。四年の間に、神宮寺とは数えきれないほど色々な所へ行き、同じものを見て同じものを食べた。家賃が浮くからと部屋をシェアし始めたら、いつの間にかもう戻れないようなところまで来ていて、落ちるように夢中になる心と、そうして落ちていく恐怖と、それを知って救いあげて欲しいという欲求の暴走で、もういっそ神宮寺と同化してしまいたいとまで思いつめるようになっていた。

それがこの春、初めて神宮寺と決定的な距離が生まれることになった。

「そろそろお前も本当にやりたいことを選べよ。俺の後をついてばかりいないでさ」

当然同じ会社を受けるつもりでいたところに、神宮寺が突然真面目な顔をしてそう告げたのだ

った。その後で、彼は笑いながら、「俺が好きなのは分かるけどよー」と続けた。そのとき、不意にそのいたずら好きの子供のような顔に、僅かな緊張が張り付いているのを見つけた。まるで大人の男が秘密を隠そうとするときのようなそれだと直感した。まだひどく荒削りで下手くそなのが、かえって癪に障った――いや、実際は違う。まるで突然の雨に降られたように、胸を抉るような悲しみに支配されたのだ。

本来なら「何か隠してんなー？」と冷やかしてでもみるのが正解だったろう。「バカじゃないの」なんていう適当さだって、そう間違っただ返しでもなかったかもしれない。しかし、動揺は思った以上に全身に広がっていた。悲しみにびしょ濡れになった身体は機能を失い、沈黙するしかなかった。それを、きっと神宮寺は変に思っただろう。

結局、その後どうなったのだったか、今となっては上手く思い出すことができない。ただはっきりしているのは、それから神宮寺との間に大きな溝が走ったという事実だけだ。それはどこまでいっても平行線で、それといつまでも並んで歩いていると、もう超えることも埋めることも敵わない、取り返しのつかない距離が出来てしまったように感じさせられた。

春が来て大学を卒業し、大学時代から住み続けている同じアパートから、別々の職場へ通うようになった。初めの頃は当番制を維持し、どちらかが作った食事を一緒に（あるいは先に）食べた。しかし、それもだんだんと崩れ、神宮寺は自分のことをあまり自分からは話さなくなり、とうとう家に帰らない日も出てくるようになった。

「今日も遅かったね」

心配になって、一度、零時を過ぎて帰ってきた神宮寺に聞いたことがある。心の大部分は、神宮寺の私生活の変化を探りたいという疾しさで埋め尽くされていたが、それを必死に押し隠し、普段通りを装って訊ねたのだった。

「まあなー、今繁忙期だから」

「とか言って、いつも遅いじゃん」

「なんだよ、いちいち突っかかって来る奴だな。だから、先寝てろって。いつも言ってんだろ、待ってなくていいよ。お前にもお前の生活があるだろ」

「別に待ってるわけじゃない。でも気になるならやめるよ」

「ぜひ、そうしてくだサイ」

そう言ってスーツを脱いだ神宮寺の背中が、まるで知らない男のそれだった。そのあまりの遠さに慄いて、慌てて問いかけた。

「最近食事とかは、どうしてんの」

「どうしてるって？ ちゃんと食ってるよ」

「例えばどんな？」

聞くと、神宮寺はいつの間にかすっかり上手くなった余裕の困惑顔で、

「そんなもん聞いてどうすんだよ、お前は」

「どうもしないけどさ、ほら、今までずっと一緒に食べてたのに、最近は別じゃん。神宮寺もさ、食にこだわり強いつていうか、割と健康志向なところあるし、だからさ、忙しくてあまり栄養あるもん食べれてないんじゃないかって」

「だから、なんだよ」神宮寺は手を腰に当て、乱暴に首の後ろ辺りをがしがしと搔くと、「食堂でちゃんと食ってるよ。ほら、俺の職場、社食があるから。今日もさ、ここ、醤油こぼして」「コロッケ？」

神宮寺は、コロッケには醤油だ。思っただけで反射的に聞くと、神宮寺はまた少し緊張を顔に乗せ、「よく分かるな。そうコロッケ。社食の野菜コロッケ、めちゃくちゃうめえんだよ」「そっか。まあ、身体壊すなよ」

言うと、神宮寺は返事ともため息ともつかない生返事で、風呂場へと行ってしまった。仕方なく、余分に作っておいた野菜コロッケと蓮根と牛蒡のきんぴらにラップをかけ、明日の弁当用にしようと冷蔵庫に閉まった。壁に掛けられた神宮寺のスーツの前を横切ると、鼻につく化学的なにおいが僅かにした。

距離感が掴めなくなったのは、あの日に開いた溝のせいだ。それとも叶わぬ夢を抱いたからか。まだ神宮寺のYシャツに顔を埋めたまま、そこにあるあらゆるにおいから嗅ぎ慣れた神宮寺の気配を何とか嗅ぎ取ろうとしている。これまで通りの日常を探し当て、安心しようとしている。だがそれを嘲笑うかのように、そこに染み込んだ一つのおいが、溝の闇をますます深くする。

Yシャツからは、今日も醤油のにおいに紛れて、女のにおいがしていた。

以前には、この空間にはなかった甘くてしつこいねばっこいにおいだ。一度吸いこむといつまでも離れない。複雑に絡まり、まるでしがみついてくるみたいに香り続ける。

あの日から、このにおいは染みついたままだ。神宮寺に完全に染み込んでしまう前に吸い取ってしまいたい。渴望が強まる一方で、だが神宮寺の真っ直ぐさを一方的に責め立ててやりたくもなる。いっそめちゃくちゃに嘘をついてくれたなら、ここから逃げられるかもしれないのに。だが、彼は決して嘘をつかない。時折宥めるように香る、醤油のにおい。また社員食堂のコロッケをこぼしたんだろう。疑う余地なんかない。神宮寺の正直さをこの世で一番よく知るのは、この俺だからだ。

突然、ダイニングの方で音がした。神宮寺が起きたのか。冷蔵庫を開ける音がする。喉が渴いたのかもしれない。緊張で、手が震えていた。肩で息をしながら、持っていたYシャツを戻そうとして、不意に「いっそ見られてしまえばいいのだ」という思いが過ぎった。そうだ、もういい。簡単なことだ、ただ音を出せばいい。この鼓動と同じくらい大きな音で神宮寺を呼べばいい。そして蔑まれる。気持ち悪いと罵られ、すべてを失えばいい！ そうすれば俺は――。

だが、音は出せなかった。神宮寺がこちらに来る気配もない。脱力し、Yシャツをそっと戻して、再び扉の隙間に身体を滑り込ませた。その時だった。ダイニングに気配があった。思わず身を硬くし、耳を澄ませると、神宮寺の足音が微かに聞こえた。一体何をやっているんだ？ 様子を窺っていると、不意に空気がぶれた。

「ごめん、古川」

突然名を呼ばれて、身体はますます硬直した。俺の部屋に向かって呟いているのか？ 裸足の足は凍えるほど冷たいのに、腋の下にじっとりと嫌な汗を掻いている。まるで絞り出しでもしたような、かすれた、疲れたその声に、心臓が締め付けられるように痛む。

「ごめんな。俺は応えてやれないんだよ。面と向かって言ってやれなくてごめん」

神宮寺はそれだけ言うと、すぐに自分の部屋へと戻り、いつものように少し乱暴に戸を閉めた。俺はその場から動くことが出来ず、目の前を横切った神宮寺の影と痛みに濡れた言葉のひとつひとつをいつまでも反芻した。

本当に嘘がつけない奴だ、昔から。

短い廊下を、時間をかけてダイニングに戻り、自分の部屋の扉に手をかけたとき一度だけ神宮寺の部屋を振り返ってみた。彼に受け入れられ、独り占めしたいという歪んだ気持ちが、不思議と少しだけ凪いでいる。

「ありがとう」

少し迷って扉に向かって、声を掛けた。それ以外に、伝えるべき言葉がない気がした。

お陰でここを出ていける。とうとうそのときが来たのだ。

明日は仕事帰りに不動産屋に寄ろう。ごく自然にそう決意して、部屋に戻り静かに扉を閉めた。暗闇の中で、これまでに感じたこともないような温かさに胸が満たされているのを感じていた。(了)